

旧四日市宿の絵図にみられる町家

— 床上部後方に土間を配した町家について (その1) —

迫垣内 裕*

1 はじめに¹⁾

現在の東広島市西条の中心地は、近世には四日市と称した西国街道の宿駅であった。当地には通称「延宝蔵」という古い町家が近年まで残存していた。この建物は既往の研究報告によれば²⁾、延宝3年(1675)創業の造酒屋の主屋として建築されたもので、通称の通り延宝年間の建築と認められると報告されている。建物は本瓦葺、妻入で、床上部に計6室の居室を配している。報告からうかがえるこの家の特徴は、幅2間半の通り庭が奥で矩折れになり、建物後半部に通常の通り庭型町家とは異なって梁間一杯に広がる土間を配していることである。したがって、床上部最奥の居室は直接この土間に接することになる。同様の特徴をもつ遺構に石井家住宅があり何れも西条を代表する町家であった³⁾。

このような居室配置と類似した同時期の古い遺構としては、旧生方家住宅(群馬県沼田市・重要文化財)がある。この遺構も後方に広がる土間が通常の町家にはみられない特異な形式であるとして、たびたび取り上げられてはいるが、類例が乏しいこともあって十分な評価はなされていない⁴⁾。また、西条近辺の竹原市や東北地方においても類例の存在が確認されていたが⁵⁾、殊更に土間や居室配置の特徴に言及したものはなかった。

このようにこの形式をもつ町家は、異例な形式でありながら、遺構数が乏しいことが主たる理由によって、今日まで十分に検討されていなかったというのが実状といえよう。ところが、筆者が調査した旧四日市宿関係の絵図史料の中には、同様の形式をもつ町家が多数描かれており、また、絵図に描かれた町家の遺構もわずかではあるが残存していることが確認できた。居室後部に広い土間を配した町家は、

前述のようにそれ自体類例が限られており貴重であるが、それだけではなく、なかには17世紀に遡ると推定される遺構も認められることから、当地域では相当古い時期からこの形式の町家が存在していた可能性が大きくなったと考えられる。また、旧生方家住宅のように当地から遠く離れた地点にも類似の形式をもつ町家が存在するという事実から、古くはより広範囲な地域に分布していた可能性も考えられ、近世町家の古形式及びその系統的発展を探るうえで重要な町家類型となる可能性がある。そのためには、まず、このような町家が存在した事実を明らかにし、その特徴を検討しておく必要がある。

本稿では旧四日市宿関係の絵図等に描かれた町家を検討資料として、当宿における町家の一般的傾向を把握するとともに、居室後方に土間をもつ町家の特徴を考察したい。

以下本稿では、通り庭型町家とは異なる土間の位置や居室配置に着目して、通り庭の後方に広がる土間を「裏土間」、また、このような土間をもつ平面からなる町家を「裏土間型町家」と呼称する。

2 絵図の概要

旧四日市宿の町家を考察するにあたって用いた絵図史料は、以下の5種類である⁶⁾。

絵図A.「宿駅四日市町並絵図(仮題)⁷⁾

絵図B.「賀茂郡四日市庄屋弥右衛門宅略絵図」

絵図C.「四日市御宿絵図 亭主本胡屋弥右衛門」

絵図D.「四日市脇本陣絵図 庄屋格祐一郎宅」

絵図E.「四日市御宿絵図 亭主向胡屋祐一郎」

何れも一括して保存されていたもので、絵図BとC、絵図DとEは縮尺は異なるが、各々同一家屋の図である。絵図B～Eには朱書で宿泊者が割り付け

*総合生活デザイン学科

られていることから、藩からの指示によって作成された宿割のための絵図であることがわかる。絵図Aの家主名や絵図B～Eの家屋名から類推すると、何れも幕末の作成と推定される⁸⁾。

本稿で主たる検討対象に取りあげる絵図Aは、宿場の明細を記したもので、街道に通じる小路や御制札等の公的施設や社寺が描かれており、街道沿いを中心とした宿全体の状況を表現している。ほぼ東西に走る街道の両側には町家の平面が連続して描かれている。町並は一部が隣村の西条東村の街道沿いまで続いていたことが他の史料から認められるが⁹⁾、宿が設置された旧四日市村の街道沿いの町家は総てその平面が描かれているので、当宿における町家の傾向を検討するには支障ない。

各家は宿請の有無によって、
 「、印御宿請之内御仕向¹⁰⁾ 頂戴人別ニ御座候
 ○印御宿請之内成立人別ニ御座候
 朱書人別者一圓御宿不仕者ニ御座候」

の3種類に区分されている。このうち、印と○印は宿請の可能な家であり、各家とも家主の名称、平面、居室の名称または畳数、付属屋の用途等が記されているが、敷地や建物の間口等の具体的な規模は記されていない。宿請が不可能な朱書の家は、街道沿いの家に限って平面が描かれているものの、、印や○印の家と異なり、宿請対象外であるためか大部分は居室の名称や畳数等の記載がない。

3 旧四日市宿の町家

絵図Aは前述のように、各戸が宿請の有無により3種に分類されている。その総数は179（、印91、○印11、朱書77）で、このうち平面の描かれている家は、157（、印80、○印11、朱書65、郡用所1）である。朱書の家的大部分は畳数の記載がないが、、印や○印の家の各室の畳数や居室の規模と比較して、各室の大きさが推定できる。本節では記載された町家平面の大きな傾向を分析することが目的なので、以下、プロポジションから比定した朱書の家も含めて検討する。検討対象とした家は148である¹¹⁾（絵図Aに描かれた各町家のデータは表4に記している）。

3-1 主屋の規模

各戸の平面から読み取れる主屋の間口と奥行の関係を示したのが表1である。最大規模は間口8間、奥行8.5間、最小規模は間口、奥行とも2間台で、両者には相当の規模差が認められるが、数のうえで支配的な

町家は間口3間台が109（約74%）と圧倒的な数であり、その中で奥行3間から7間台のものが93（約85%）を占めている。この程度の小規模な建物が当宿の支配的な主屋の規模であったことがうかがえる。間口規模が5間以上の大型町家は、数こそ少ないが、宿の中心部に集中して存在する。

表1 主屋規模

		間口間数							計
		2	3	4	5	6	7	8	
奥行間数	2	3	9	2					14
	3		19	5	1				25
	4		16	5	1				22
	5		27	1		1			29
	6	2	16	4	1				23
	7		15						15
	8		6	1	2		2	1	12
	9		1		2	2	1		6
	10					2			2
		計	5	109	18	7	5	3	1

注：間数については、例えば2は2間台の意

表2 主屋平面の類型

平面類型		街道北側	街道南側	計
1 列 型	1-1	8(2)	5(0)	13(2)
	1-2	33(10)	13(5)	46(15)
	1-3	22(11)	36(23)	58(34)
	1-4	5(0)	9(3)	14(3)
	1-5	2(0)	0	2(0)
2 列 型	2-2	1(1)	4(1)	5(2)
	2-3	4(4)	2(2)	6(6)
	2-4	0	4(4)	4(4)
計		75(28)	73(38)	148(66)

注：()裏土間型(内数)

3-2 平面

主屋の平面を床上部の正面室数と奥行室数の違いで分類したのが表2、絵図Aからその典型例を示したのが図1である。表2によれば、対象戸数148のうち、1列型が133で全体の約90%と圧倒的な数を占めており、奥行室数は2室または3室のものが通例である。他の在郷の町家と同様にこの程度の1列系の小規模な町家が当宿におけるありふれた形式であった。一方、2列型は該当例こそ15と少ないが、主屋規模や間口規模が大きく、宿の中心部を占有し、しかも年寄や庄屋

などの役職を務める家が含まれていることから¹²⁾、当宿の有力階層の町家の類型と考えられる。

4 裏土間型町家

4-1 傾向

前節で検討した四日市宿の町家の平面の諸傾向の中で、特に注目されるのは、いわゆる裏土間型町家の存在である(表2)。裏土間型の町家は全国的に類例が乏しいので、その性格は不明の点が多いが、当宿においては1列型のうち54(約41%)と半数近くが裏土間に該当し、最も類例の多い1列3室型に至っては58のうち裏土間型が34と、実に59%を占めている。また、2列型においては12(80%)と大部分がこの型に属している。

以上のような諸傾向から、少なくとも幕末期の当宿においては、通常よくみられる通り庭型の町家と裏土間型の町家が混在していたこと、しかも、このうち半数近くが裏土間型であり、裏土間型の町家のごくありふれた状況であったことがわかる。特に2列型の町家においては、裏土間型が完全に支配的な町家類型であったわけで、通り庭型の町家が一般的な類型であった他地域とは明らかに異なった様相を呈していたことが判明する。

4-2 他の絵図にみられる町家

絵図B~Eは、何れも部屋ごとに休泊者とその人

数が記載された宿割用の図で、絵図Aと比較すると、部屋の用途や間仕切の種類などが記されており、より具体的な裏土間型町家の平面構成を知ることができる。

絵図B(図2)と絵図Cは庄屋であった本胡屋弥右衛門宅で、絵図Aの「英助」宅(表1のS46)、また、絵図D(図3)と絵図Eは庄屋格の向胡屋祐一郎宅で、絵図Aの「脇本陣」(表1のS52)に該当する¹³⁾。両宅とも宿の中央部付近の広大な間口をもつ敷地にあり、主屋も規模が大きく、当宿の有力町家の様相が知られる。

主屋は何れも通り庭が後方で間口一杯に広がった裏土間となり、床上部は居室が2列に配されている。裏土間に面した部屋のうち上手の部屋が「台所」(絵図Aでは「茶間」)にあてられており、特に祐一郎宅では台所に接して「クド」が置かれ、裏土間後部には「小釜」、「湯釜」、「水場」等の台所設備の類が記してあり、裏土間廻りの利用状況を具体的に知ることができる。次に弥右衛門宅において表側から3室目上手の部屋が、同様に祐一郎宅では2室目上手の部屋が、何れも「納戸」と記されており、2列型における床上部上手側中央部付近の部屋の使用状況が知られる。また、何れも街道沿いに門を構え、主屋とは別棟の式台付きの本格的な接客座敷を設けているが、当宿の他の町家にもみられるように、街道沿いにも主屋から居室を突出させている。特に祐一郎宅は、この部分が床の間付きの座敷に使用されてい

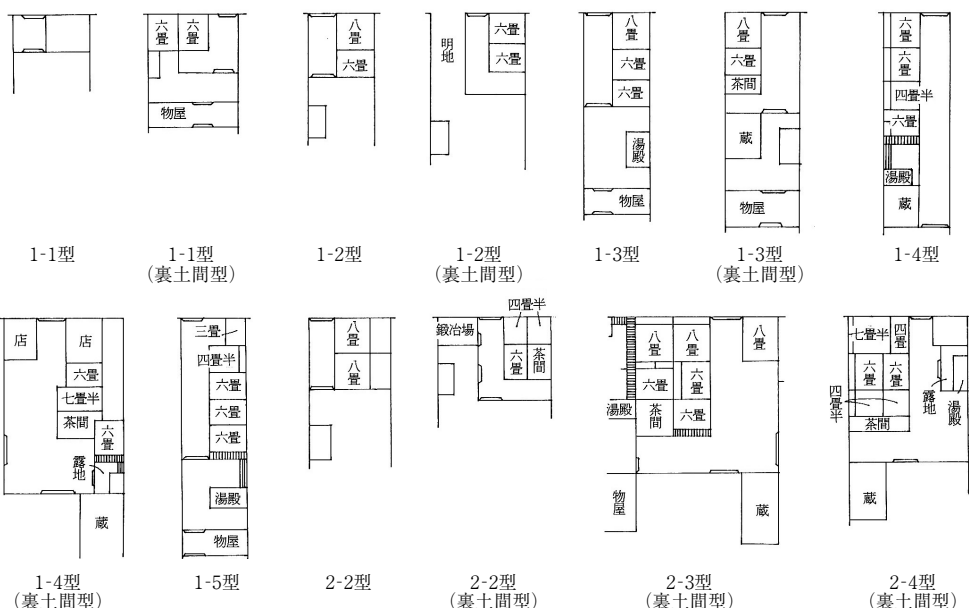


図1 主屋平面類型(絵図Aより)

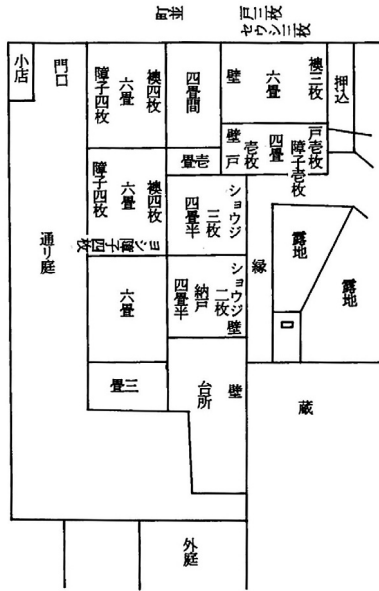


図2 本胡屋弥右衛門宅（絵図Bより）

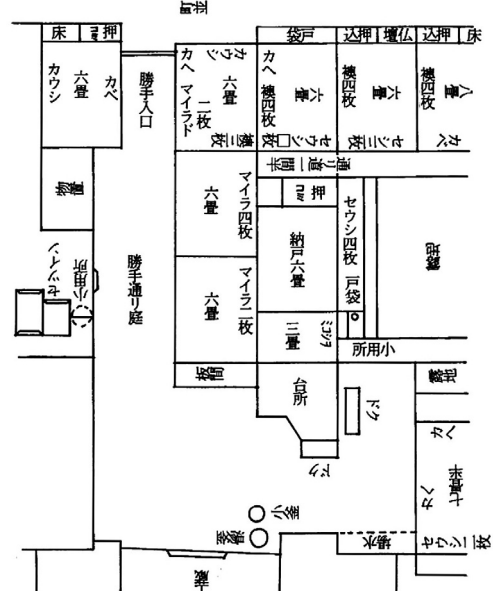


図3 向胡屋祐一郎宅（絵図Dより）

たことがうかがえ、絵図Aに描かれた同様の平面をもつ町家について、この部分の利用法を類推するうえで貴重な事例である。

4-3 絵図にみられる裏土間型町家の特徴

(1) 「茶間」と裏土間

絵図Aから抽出できる裏土間型町家は、1列型、2列型という種類の違いに関わりなくその存在が認められる。何れの類型の場合も、裏土間を建物後部の間口一杯にとるのが原則であって、1列型においては居室最後部の部屋が、また、2列型においては居室最後部あるいは最後部上手の部分が「茶間」と記されている場合が一般的である（表3）。絵図Aからは「茶間」が裏土間に面していることや裏土間の規模等限られた情報しか得られないが、前項で取りあげた向胡屋祐一郎宅ではここが「台所」と称されており、さらに裏土間にクド、釜、水場を設置している状況から考えると、「茶間」は、一般に言及されているように¹⁴⁾、食事と団らんの機能を兼ね備えた部屋と解釈して支障ないであろう。したがって、居室最後部から裏土間にかけての空間は、食事や炊事など主として内向きの用途に使用されていたことが明らかである。

(2) 座敷

裏土間をもつ町家の場合、通り庭型町家によくみられるように、主屋内の居室最後部に座敷を配することは平面構成上不可能である。事実、絵図からは主屋内の部屋廻りに縁や押込、床の間などの設備を設けてい

たとみなされる事例¹⁵⁾は、1列型では6例と極めて少数しか認められない。したがって、間口に余裕がなく主屋のみで構成される町家、特に1列型の場合は、充実した座敷の類はなく、居室廻りに設備らしい設備もない簡素な構成であったのではないかと推定される。一方、2列型の場合は床上部に比較的余裕があるためか、大部分が居室廻りに何らかの設備を設けている。

次に間口に余裕がある町家の該当例は1列型27例、2列型11例である（表3）。1列型の場合は主屋床上部側面に居室を突出させることにより部屋数を増やしているが、床の間、縁といった設備を部屋廻りに付加していると認められる例は稀で、居室のみで構成され

表3 裏土間型町家の各部形式

	1列型 該当数54	2列型 該当数12
居室最後部に「茶間」があるもの*1	33	9
主屋内に縁、押込、床の間等の設備があると認められるもの	6	10
主屋に対して敷地間口に余裕があるもの*2	27	11
1) 床上部側面を開口	0	6
2) 床上部側面に居室を突出	14	3
3) さらに独立棟を作るもの	0	3

*1：宿請別朱印の家屋で居室名が記載されていないものは省略
*2：複数に該当するものを含む

旧四日市宿の絵図にみられる町家

表4 「宿駅四日市町並絵図（絵図A）」掲載家屋一覧

その1 街道北側東端より									
番号	家主名	宿請別	屋敷規模			主屋平面類型	備考		
			敷間口(間)	開口(間)	奥行(間)				
N 1-1	虎造貸家	** 朱	7.0	3.5	2.0	1-1			
N 1-2		** 朱		3.5	2.0	1-1			
N 2-1	勘六	** 〃	10.5	3.5	4.5	1-3			
N 2-2		** 〃		3.5	5.5	1-3	湯殿、物屋		
N 3	茂右衛門	** 〃	4.5	3.5	6.0	1-4	4室目茶間小、物置		
N 4	茂右衛門貸家吉平	** 朱	3.5	3.5	3.0	1-2			
N 5	利八	** 〃	7.0	4.5	4.5	2-2	裏土間型 茶間、東側鍛冶場		
N 6	才助	** 朱	3.5	3.0	5.0	1-2	裏土間型 裏土間後方に物屋接続		
N 7	才助貸家	** 〃	3.0	3.0	3.0	1-2			
N 8	保平	** 〃	10.0	5.0	7.0	2-3	裏土間型 通庭なし、東側門、湯殿、裏土間後方に蔵接続		
N 9	広吉	** 〃	4.0	4.0	3.0	1-2			
N10	なみ	** 朱	3.5	3.5	3.0	1-2	2室目茶間		
N11	儀三次	** 〃	3.5	3.5	3.5	1-2			
N12	保兵衛	** 〃	3.5	3.5	3.0	1-2			
N13	儀八	** 〃	3.5	3.5	4.5	1-3	3室目茶間		
N14	新平	** 朱	6.5	3.5	4.5	1-2	裏土間型 東側明地		
N15	□平	** 〃	3.5	2.0	6.0	1-2	裏土間型 2室目茶間、西側居室2室附属、露地、湯殿		
N16	嘉八	** 〃	4.5	3.0	3.0	1-1	裏土間型 東側居室1室附属、物屋		
N17	直次	** 〃	6.0	3.0	4.0	1-2	裏土間型 西側明地		
N18	伊助	** 〃	3.0	3.0	3.5	1-2			
N19	弁蔵	** 〃	3.0	3.0	3.0	1-2			
N20	常助	** 〃	5.0	5.0	5.5		裏土間型 戸口2、中央土間、茶間あり、湯殿、物屋		
N21	嘉平	** 〃	5.0	5.0	6.5		裏土間型 中央土間、茶間あり、湯殿、鍛冶場		
N22	与七	** 〃	5.5	5.5	6.0	1-3	裏土間型 3室目茶間、露地、湯殿		
N23	秋平	** 〃	6.5	4.0	6.5	1-3	裏土間型 3室目茶間、東側居室2室附属、門、露地2、湯殿、物屋		
N24	喜平貸家	** 〃	3.5	3.5	5.0	1-3			
N25	喜七	** 〃	7.0	5.0	8.0	1-4	裏土間型 4室目茶間、裏土間小、東側居室1室、露地、湯殿、物屋		
N26	茂助	** 〃	3.5	3.5	4.0	1-3	裏土間型 3室目茶間、湯殿、物屋		
N27	□	** 〃	3.5	3.5	5.0	1-3	湯殿、物屋		
N28	政兵衛	** 〃	3.5	3.5	7.0	1-4	湯殿、物屋		
N29	伝右衛門	** 〃	12.5	7.5	8.5	2-3	裏土間型 上手3室目茶間、通庭後方蔵接続、土間下手居室1室、門、露地、湯殿2、蔵2、物屋		
N30	右十郎	** 〃	12.0	7.5	8.5	2-3	裏土間型 上手3室目茶間、土間下手居室1室、門、露地、湯殿2、物屋2		
N31	用平	** 〃	3.5	3.5	4.5	1-2	土間下手茶間独立、湯殿、物屋		
N32	和平	** 〃	3.0	3.0	7.5	1-4	裏土間型 土間奥行8.5間、露地、湯殿、蔵、物屋		
N33	彦一	** 〃	18.0	8.0	8.5	2-3	裏土間型 上手3室目茶間、土間下手居室1室、門、露地2、湯殿、蔵4、酒造蔵、馬屋、物屋		
N34	貞平	** 〃	3.0	4.0	1-2		裏土間型 後方居室2室接続、湯殿、物屋		
N35-1	植蔵	** 〃	6.5	3.0	7.5	1-3	裏土間型 裏土間後方に蔵接続		
N35-2		** 〃		3.5	6.5	1-3	土間奥行7.5間、3室目2室、露地、湯殿、物屋		
N36	三□□□	** 朱	3.5	3.5	7.5	1-5			
N37	甚五平	** 〃	5.5	3.0	6.5	1-3	裏土間型 3室目茶間、東側店接続、西側居室3室、露地2、湯殿		
N38	元助貸家浅蔵	** 朱	3.0	3.0	5.0	1-3	1室目小、表側土間大		
N39	良助	** 〃	3.5	3.5	5.0	1-3			
N40	貞助	** 朱	3.0	3.0	6.0	1-3	裏土間型		
N41	山田□□	** 〃	6.5	5.0	8.0	2-4	裏土間型 主屋門後方にあり、門、露地2、湯殿2、蔵、物屋		
N42	□兵衛	** 〃	3.5	3.5	6.5	1-3			
N43	兵助	** 〃	5.5	3.5	7.0	1-4	裏土間型 通土間後方蔵接続、土間奥行8.5間、土間下手茶間独立、東側居室1室、露地、湯殿		
N44	半兵衛貸家儀助	** 朱	3.0	3.0	4.0	1-2	裏土間型		
N45	岩蔵	** 朱	5.0	5.0	5.0	1-2	裏土間型 中央土間		
N46-1	永兵衛貸家用助	** 〃	5.5	3.0	7.0	1-3	裏土間型 3室目茶間		
N46-2		** 〃		2.5	7.0	1-3	裏土間型 表側全面土間		
N47-1	元次郎	** 〃	3.0	5.0	1-2		裏土間型		
N47-2		** 〃		4.0	4.5	1-2	裏土間型 土間に茶間突出、湯殿		
N48	徳太郎	** 朱	13.0	6.0	10.5	2-3	裏土間型 上手3室目茶間、東側居室1室、露地2、湯殿2、馬屋、物屋、ナカヤ		
N49	喜助	** 〃	6.0	3.0	5.5	1-3	裏土間型 3室目茶間、西側居室1室、露地、湯殿		
N50	吉兵衛	** 朱	3.5	3.5	5.5	1-3	裏土間型		
N51	伊平	** 〃	6.0	3.5	8.5	1-3	裏土間型 通土間後方蔵接続、3室目茶間、東側居室3室接続、露地、湯殿、物屋		
N52	喜助	** 朱	3.5	3.5	5.5	1-3	裏土間型 1室目小、表側土間大		
N53	半兵衛	** 〃	6.0	3.5	6.5	1-3	裏土間型 土間奥行8.0間、土間へ茶間突出、西側居室1室接続、露地3、湯殿、物屋		
N54	甚平	** 〃	3.5	3.5	8.0	1-5	裏土間型 1室目小、表側土間大、湯殿、物屋		
N55	□兵衛	** 〃	7.5	7.5	3.5	1-1	裏土間型 表側全面土間、後方2室（1室茶間）接続		
N56	才助	** 〃	4.5	3.5	4.5	1-2	裏土間型 2室目茶間、西側明地		
N57	平蔵	** 〃	3.5	3.5	6.5	1-4	湯殿、物屋		
N58	平蔵貸家□助	** 朱	3.0	3.0	5.0	1-2	裏土間型		
N59	庄兵衛	** 〃	4.5	3.0	5.0	1-2	裏土間型 西側明地		
N60	元助	** 朱	5.5	3.5	4.5	1-2	裏土間型 西側納屋接続		
N61	良兵衛	** 〃	8.5	3.5	9.0	1-3	裏土間型 3室目茶間、西側居室5室接続、露地、湯殿、物屋		
N62	永兵衛貸家弥三郎	** 朱	4.0	4.0	3.5	1-2			
N63	惣助	** 朱	3.0	3.0	2.5	1-2			
N64	□助	** 〃	3.5	3.5	3.5	1-2			
N65	惣兵衛	** 〃	8.5	3.5	8.0	1-3	裏土間型 3室目茶間、西側居室2室接続、湯殿		
N66	金蔵	** 朱	3.5	3.5	3.5	1-2			
N67	吉助貸家	** 朱	3.5	3.5	3.0	1-2			
N68	小次郎貸家	** 朱	3.5	3.5	3.5	1-2			
N69	良兵衛貸家	** 朱	3.5	3.5	5.0	1-3			
N70	小次郎	** 〃	4.0	4.0	4.0	1-2	裏土間型 2室目茶間、西側居室1室、露地、湯殿		
N71	豊吉	** 〃	6.0	3.0	2.5	1-1	裏土間型 西側居室1室接続		
N72-1	同人貸家(永兵衛)	** 朱	6.0	2.0	2.0	1-1			
N72-2		** 〃		2.0	2.0	1-1			
N72-3		** 〃		2.0	2.0	1-1			
N73	同人貸家(〃)	** 朱	7.5	3.5	5.0	1-2	裏土間型 東側居室2室		
N74	同人貸家(〃)	** 朱	3.5	3.5	3.5	1-2			
N75	同人貸家(〃)	** 朱	6.0	4.0	3.5	1-2	西側明地		
N76	永兵衛貸家	** 朱	5.0	4.0	3.0	1-2	東側明地		
N77	永兵衛貸家浅吉	** 朱	3.5	3.5	3.0	1-2			
N78	友吉	** 朱	3.5	3.5	2.5	1-1			

迫垣内 裕

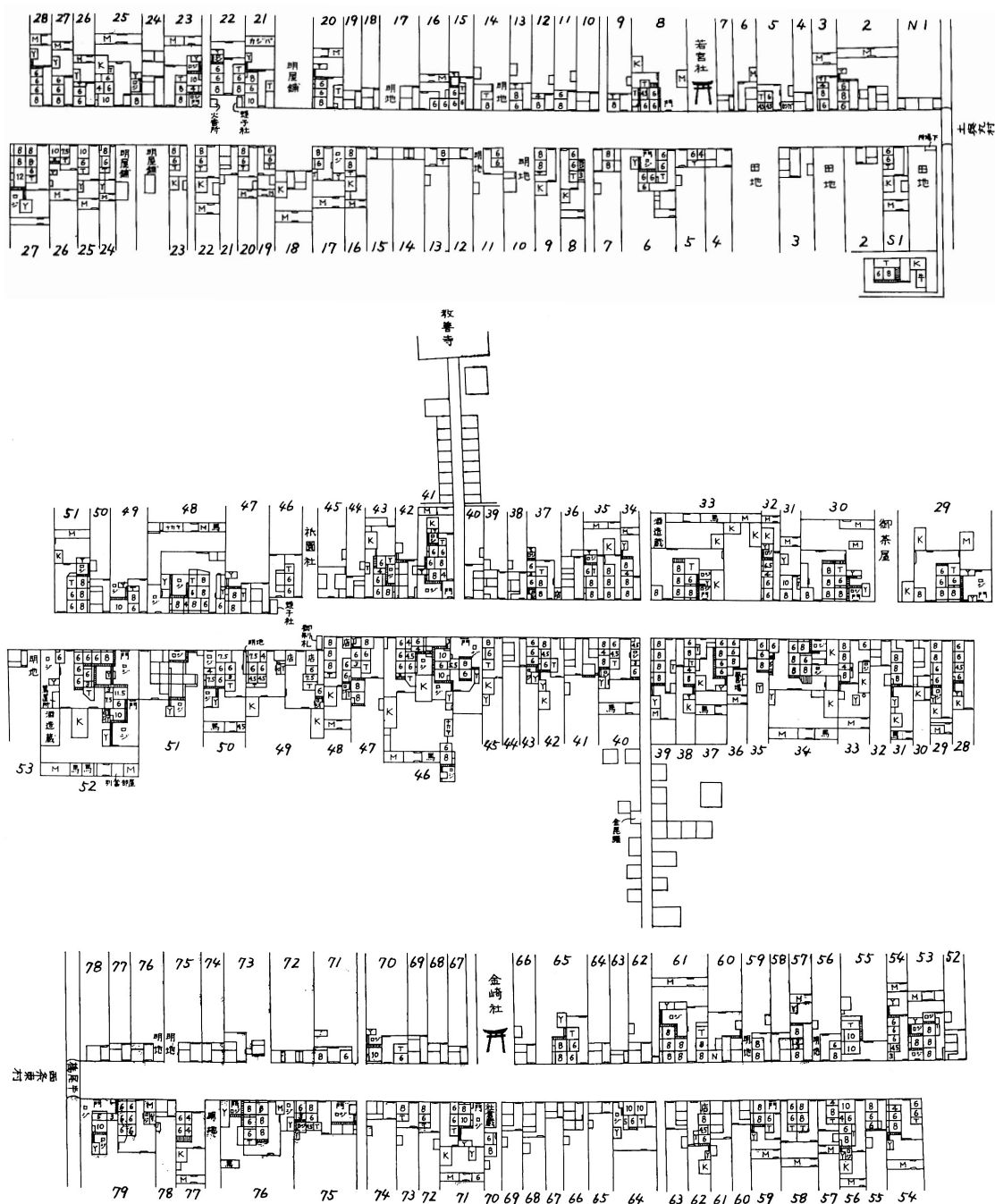
その2 街道南側東端より		宿 種 別	屋敷 間口 (間)	主屋規模		主屋平面類型	備 考
番号	家 主 名			間口 (間)	奥行 (間)		
S 1	助七	*	4.0	3.5	5.0	1-3	裏土間型 裏土間後方蔵接続、物屋
S 2	嘉十	*	6.5	3.5	3.0	1-2	
S 3	利三兵衛	*	6.0	3.5	5.0	1-3	
S 4	新十	*	5.0	5.0	3.0	1-2	
S 5	用助	*	4.5	4.5	3.0	2-2	
S 6	源三郎	*	9.5	3.5	7.5	1-3	
S 7	庄七	*	4.5	4.5	4.0	2-2	
S 8	新兵衛	*	4.0	3.0	7.0	1-3	
S 9	武助	*	4.5	3.5	6.0	1-3	
S 10	伊八	朱	5.0	2.0	3.0	1-1	
S 11	吉平	*	5.5	3.5	4.0	1-2	裏土間型 裏土間後方蔵接続、物屋
S 12	利助次	*	4.0	4.0	2.0	1-1	
S 13	友助	*	4.0	4.0	2.0	1-2	
S 14-1	左太郎貸家伊蔵次	朱	6.0	3.0	2.0	1-1	
S 14-2		朱	3.0	2.0	2.0	1-1	
S 15	同人貸家柳助	朱	4.0	4.0	2.0	1-1	
S 16	弁蔵	*	3.5	3.5	5.0	1-3	
S 17	恵助	*	5.5	3.5	6.0	1-3	
S 18	利兵衛	*	6.0	3.0	3.0	1-2	
S 19	多助	*	3.0	3.0	5.0	1-3	
S 20	忠兵衛	*	3.5	3.5	5.5	1-3	
S 21	音助	朱	3.0	3.0	5.0	1-3	裏土間型 裏土間後方蔵接続、物屋
S 22	徳兵衛	*	4.0	4.0	5.5	1-3	
S 23	弥助	*	3.5	3.5	5.5	1-3	
S 24	庄次郎	*	3.0	3.0	6.0	1-3	
S 25	源蔵	*	4.0	4.0	6.0	1-3	
S 26	政右衛門	*	5.0	3.0	4.5	1-2	
S 27	友三郎	*	6.5	4.0	7.5	1-4	
S 28	千蔵	*	3.5	3.5	7.5	1-4	
S 29	清八	*	3.5	3.5	8.5	1-4	
S 30	作兵衛	朱	3.0	3.0	6.5	1-3	
S 31	喜平	*	3.5	3.5	8.5	1-4	裏土間型 裏土間後方蔵接続、物屋
S 32	嘉兵衛貸家三兵衛	朱	3.5	3.5	4.0	1-3	
S 33	嘉兵衛	*	5.5	3.5	7.5	1-4	
S 34	栗助梅明家	朱	7.0	9.0	2.0	2-3	
S 35	吟兵衛	*	3.5	3.5	3.5	1-2	
S 36	丈平	*	3.0	3.0	5.5	1-3	
S 37	仙三郎	*	5.5	3.0	5.0	1-3	
S 38	新三郎	*	3.0	3.0	5.0	1-3	
S 39	安右衛門	*	4.0	4.0	8.5	1-4	
S 40	庄兵衛	*	7.0	3.5	7.0	1-3	
S 41-1	又助	朱	5.5	2.5	6.5	1-2	裏土間型 裏土間後方蔵接続、物屋
S 41-2		*	3.0	6.5	1-3		
S 42	久右衛門	*	4.0	4.0	6.0	1-3	
S 43	佐助	*	3.0	3.0	5.0	1-3	
S 44	岩蔵貸家用平	朱	3.0	3.0	5.0	1-3	
S 45	若蔵	*	3.5	3.5	7.0	1-3	
S 46	英助	○	16.5	5.0	9.0	2-4	
S 47	九十郎	*	5.0	3.5	7.0	1-3	
S 48	永兵衛	*	4.5	3.0	8.5	1-4	
S 49-1	永兵衛	○	12.5	5.0	9.5	1-4	
S 49-2		*	5.0	8.0	2.4	2-4	
S 50	内内	*	6.5	3.0	8.0	1-4	
S 51	郡用所 脇本陣	*	11.0	5.0	8.5	1-4	裏土間型 裏土間後方蔵接続、物屋
S 52		○	16.5	6.0	10.0	2-4	
S 53	祐一郎貸家紋蔵	朱	5.0	3.0	3.0	1-2	
S 54	友平	*	6.0	3.5	6.5	1-3	
S 55	吉蔵	*	3.5	3.5	5.5	1-3	
S 56	良兵衛貸家	朱	4.0	4.0	8.0	1-3	
S 57	庄助	*	3.5	3.5	5.0	1-3	
S 58-1	好助	朱	6.0	3.5	6.5	1-3	
S 58-2		*	2.5	6.5	1-3		
S 59	茂十郎	*	5.0	2.5	4.5	1-3	
S 60	利助	朱	3.0	3.0	4.0	1-2	
S 61	元助	朱	3.5	3.5	6.5	1-3	裏土間型 裏土間後方蔵接続、物屋
S 62	忠五	*	3.5	3.5	7.5	1-4	
S 63	作蔵	朱	3.5	3.5	5.0	1-3	
S 64	与七	*	7.0	5.5	4.5	2-2	
S 65	森助	*	3.5	3.5	2.0	1-1	
S 66	丈平	朱	4.5	3.5	4.5	1-3	
S 67	幾蔵	*	3.0	3.0	2.5	1-2	
S 68	永兵衛貸家	朱	3.5	3.5	6.0	1-3	
S 69	佐蔵	*	3.5	3.5	5.0	1-2	
S 70	卯七	*	3.0	2.0	4.0	1-1	
S 71	吉助	*	8.0	3.5	7.5	1-3	裏土間型 裏土間後方蔵接続、物屋
S 72	文蔵	*	3.5	3.5	5.5	1-3	
S 73	甚助	*	3.5	3.5	4.0	1-2	
S 74	文平	朱	4.5	4.5	3.0	1-3	
S 75	平助	*	10.5	6.0	5.0	1-3	
S 76	友四郎	*	11.5	6.0	9.0	2-4	
S 77	忠兵衛	*	4.5	4.5	6.0	2-2	
S 78	喜三八貸家	朱	3.0	3.0	3.0	1-2	
S 79	是助	*	12.5	6.5	9.5	2-3	

注) 掲載家は街道沿いに位置するもので、間取は記してあるが街道沿い建物の背後にある1軒は省略した。また、小路沿いのものはすべて間取が描かれていない。絵図は街道北側は西端から、街道南側は東端から書き始められているが、家屋位置を特定しやすいよう何れも東端から各家屋に番号を割り振った(明屋舗3、田地3、明地1省略)。
家屋の番号は図4の番号と対応する。

基礎データ	街道北側	街道南側	総計
・敷地割総数	79 (明屋舗1含む)	85 (明屋舗2、田地3、明地1含む)	164
・家主名及び間取記載のもの	78 (○: 6、\: 36 朱: 36)	79 (○: 5、\: 44 朱: 29、郡用所1)	157
・検討対象とした家屋戸数	75 (2軒長屋5、3軒長屋1含む)	73 (2軒長屋4含む)	148
・検討除外家屋戸数	10	10	20

凡例)
*: 検討対象とした家屋
宿主種別 ○: 御仕向頂戴人別 \: 成立人別 朱: 御宿不仕者
主屋平面類型 例え1-3: 正面1列奥行3室の意
屋敷間口及び主屋規模は推定(単位: 間)

旧四日市宿の絵図にみられる町家



注： 図中番号は表4と対応する。

間取の数値： 畳数 T：茶間 K：蔵 M：物屋
 N：納屋 Y：湯殿 馬：馬屋

図4 絵図A概略図

るものが多い。一方、2列型の場合は大部分が敷地間口に余裕があり、この部分を利用することによって、居室部側面を開口して座敷にあてたとみなされる例が多くみられる。

また、向胡屋祐一郎宅のように主屋脇に棟を突出させることによって、接客用の座敷を接続したり、さらに、別棟の接客用座敷を設けていたと読み取れるものもある。全般に2列型は1列型より充実した居室構成であることが認められる。

(3) 納戸

本胡屋弥右衛門宅や向胡屋祐一郎宅に代表される2列型町家の場合は、上手側中央付近の部屋が「納戸」と記されていることから、その使用状況が明らかになるが、1列型の場合はその位置も明確ではない。しかしながら、主屋後半部すなわち裏土間及びそれに面した「茶間」が炊事や食事などの空間に充てられていることから考えると、茶間に近接した居室が寝室等の空間にあてられた可能性が考えられる。独立した納戸を配する可能性をもつ奥行3室以上の町家の場合、例えば、当宿の1列型において最も類例の多い奥行3室構成の町家では、2室目が納戸に使用されたのではないかと推定される¹⁶⁾。

このように絵図に描かれた町家から類推できる裏土間型町家の平面構成は、通常の通り庭型町家とは空間構成上基本的に異なった部分が随所に認められる。

5 むすび

以上、旧四日市宿の絵図を通して、幕末における当宿の町家について、特に裏土間をもつ町家に注目しながらその特徴を考察してきた。その結果を整理要約すると以下のようになる。

①幕末期の旧四日市宿には全国的にも特異な類型である裏土間型町家の存在が確認できる。

②当宿には1列型と2列型の町家が存在するが、2列型においては裏土間型が支配的な類型として存在する。また、1列型においては一般的な類型である通り庭型町家と混在しているが、当宿の標準的な存在である1列3間取型では、裏土間型が支配的な存在形態であり、規模、階層の差異にかかわらず、当宿においては裏土間型が一般的な町家の類型であったことが確認できる。

③裏土間に接した居室は食事や団らんなど家族の日常生活空間として使用され、その後方に広がる裏土間は主に炊事用の土間として使用されていた。

④座敷を配する場合、通り庭型では居室最後部をこ

れにあてるのが通例であるのに対して、裏土間型においては、1列型では最後部が茶間にあてられるため、接客に使用可能な座敷というものには特に設けていなかったと推定される。また、2列型については間口に余裕がある場合は上手側の1室目または2室目をこれにあてるか、さらに街道沿いに突出させて居室部を作り、ここを座敷として利用する例がみられる。

⑤裏土間型は、主屋後方の裏土間を中心とした空間を日常生活空間に使用している。また、土間の配置や居室の利用形態に通り庭型町家とは歴然とした違いがみられることから、通り庭型町家とは異質な町家の類型である可能性が強く、注目すべき類型と考えられる。

しかし、裏土間型町家の構造や平面の細部などについて検討するには、現存遺構を基にした復原的考察が不可欠であり、また、この型の町家が年代的にどこまで遡及可能なのかを検討するためにも現存遺構の復原的考察が不可欠である。別稿では、裏土間型町家遺構の復原的考察を通して、その諸特徴をより具体的に検討し、さらに本稿で得られた結果も併せて、裏土間型町家の特質について考察する予定である。

注

- 1) 本研究の一部は次の2編で発表済みであり、その後の知見を加えて報告するものである。迫垣内裕：宿駅四日市の町並絵図について、日本建築学会中国・九州支部研究報告第6号、p417-420、昭和59年3月、迫垣内裕：宿駅四日市の町家について、日本建築学会大会学術講演梗概集、p2569-2570、昭和59年10月。
- 2) 佐藤重夫：延宝蔵について、日本建築学会中国支部研究報告、p41～p44、昭和37年7月。延宝蔵は取り壊されてしまい、現在では当研究報告が取り壊し以前の形態を知り得る唯一の資料である。
- 3) 石井家住宅はその後東広島市指定重要有形文化財の指定を受け移築修理工事が施された（東広島市指定重要有形文化財旧石井家住宅移築修理工事報告書、東広島市教育委員会、平成9年3月）。
- 4) 旧生方家住宅の場合は、建物間口一杯に土間が広がらず居室の一部が裏まで続いている点が若干異なるが、後方に広い土間がある点は同様である。大河直躬：旧生方家住宅（日本建築史基礎資料集成21民家所収、中央公論美術出版、昭和51年4月）では、居室配置の特色の一つとして、居間（板の間）後方が広い土間になっていることを指摘している。また、

旧四日市宿の絵図にみられる町家

- 吉田靖ほか2名：日本の民家5町家Ⅰ，学習研究社，昭和55年11月並びに宮澤智士：万有ガイド・シリーズ 日本の民家，小学館，昭和60年3月では，平面が町家として異例な形式であることを指摘した後で，近世的な町家が定形化する以前の古い形を示すものらしいと類推している。
- 5) 佐藤重夫：竹原吉井家住宅について，日本建築学会中国支部研究報告，p57～60，昭和40年9月及び東京大学工学部建築学科建築史研究室：竹原一歴史的街区の形成と展開一，昭和53年。後で報告されている遺構のうち，該当するのは吉井家住宅以外に大瀬家住宅がある。また，東北地方関係では，関口欣也：秋田県の民家，秋田県教育委員会，昭和48年3月，草野和夫他：黒石の町並，黒石市教育委員会，昭和59年3月，草野和夫：東北民家史研究，中央公論美術出版，平成3年4月において，若干数報告されている。
- 6) その他に「賀茂郡往還筋景色絵図」，「賀茂郡四日市御茶屋絵図」が一括して保存されていた。何れの史料も，広島県立文書館蔵竹内家文書（調査当時，竹内直文氏所有広島県史編纂室寄託）。なお，本稿で取り上げた絵図を紹介，解説した文献としては，西条町編集発行：西条町誌，昭和46年，明治大学神代研究室：安芸／西条（SD，鹿島出版会，昭和50年），観光資源保護財団編集発行：東広島市の町並み，平成4年3月，旧石井家住宅移築修理工事報告書（前掲注3）などがあるが，何れも描かれた町家について触れられているが，その詳細な分析は行われていない。
- 7) 当該絵図が初出である前掲注6の『西条町誌』に記載の仮題に倣った。
- 8) 調査当時，年紀の記載は詳らかでなかったが，前掲注6の「東広島市の町並み」，注3の「旧石井家住宅移築修理工事報告書」では，慶応元年の記載がある。絵図中の記載名は，明治2年の「賀茂郡役人役格輩筆順録」（竹内家文書）記載の名称と一致し，かつ前掲注6『西条町誌』掲載の元禄以降の役人名と一致するのは，天保以降明治4年廃藩置県までの役人名であるので，幕末の作成であるのは明らかである。
- 9) 前掲注6の「賀茂郡往還筋景色絵図」による。
- 10) 「仕向」とは「駅仕向銀」ともいい，窮乏を呈した宿駅に対してその保護育成を図るため，藩から貸与された基金のことである（土井作治氏の御教示による）。
- 11) 役宅や，通り庭がないもの，中央に土間があるもの，主屋位置が街道から離れているもの，街道沿い全面に土間を配するものなど特異な平面からなるものは，検討対象から除外した。
- 12) 前掲注8の「賀茂郡役人役格輩筆順録」による。
- 13) 前掲注6の『西条町誌』掲載の役人名によれば，英助の先代が弥右衛門で二代続いて庄屋を務めており，家屋規模，間取とも一致する。また，祐一郎については絵図A，絵図Dに脇本陣とあり，家屋規模，間取とも一致する。
- 14) 彰国社編集発行：建築大辞典，昭和51年3月及び日本建築学会民家語彙集録部会編：日本民家語彙集解，日外アソシエーツ，昭和60年10月による。
- 15) 絵図Aでは縁の識別は可能である。また，押込や床の間などの設備についてはその有無は判別可能であるが，押込か床の間かといった設備内容の峻別は困難である。
- 16) 例えば，旧鈴木家住宅（19世紀前半，日本民家園・旧所在福島市）は裏土間を配した1列4室型で，当宿の裏土間型町家と平面構成上極めて類似性が強く注目される遺構である。当家の場合，表側から2室目が納戸にあてられている。

（受理 平成24年10月31日）

迫垣内 裕

Abstract

THE TOWNHOUSES FROM THE HISTORICAL MATERIALS OF YOKKAICHI OLD POST TOWN
A study on the townhouses with the earth-floored area to the rear of the raised floored area (Part 1)

Yutaka SAKOGAICHI*

Yokkaichi district of Higashihiroshima City, Hiroshima Pref. is an old post town. The historical materials on the townhouses in the end of the Edo period remain here. In these materials the each floor plan of the townhouses that is built in both sides of a main street is depicted. It is the purpose of this paper to clarify various tendencies of the townhouses and that the style of these townhouses is different with a general townhouse obviously.

(Received October 31, 2012)

* Department of Comprehensive Human Life Studies